

時評

佐藤洋一郎

総合地球環境学
研究所副所長・教授



先日バンコクで「世界野生イネ会議」という学会を開いた。10を超える関係国から120名を超える研究者が参加して、ずいぶん盛大な会となった。野生イネはイネの原種で、日本には生えていない。そのせいか日本では野生イネに関心を持つ人などほとんどいない。専門家でも、野生イネが持つ遺伝子をも

将来の品種改良に使うとうい試みもなくはないが、それでも認知度はかなり低い。野生イネの研究をしていますなどという、「へえ」といわんばかりの反応が返ってくることもまれではない。

タイはじめ東南アジアでは日本と事情が少し違う。野生イネはずいぶん身近な存在だからだろう。野生イネは多くの場合、

世界野生イネ会議

道路際の水路に生えている。道路は、雨季に水に浸からないよう周囲の土を盛って作られるが、土を取ったあとにできた幅の広い水路に野生イネは生えているのである。

東南アジアでは最近の目覚しい経済発展で、それまでの農地を埋め立てて都市が拡大している。主要道路はほとんど幅が広がられている。これが原因で、

では野生イネの保護活動が100%受け入れられているかといえ、そうでもない。というのは、ときどき雑草となって水田に入り込み、農民を困らせるからである。野生イネの種子が販売用のコメにわずかも混ざると、品質が下がり買い叩かれてしまう。たちの悪いことに、野生イネには除草剤が使えない。野生イネに効く除草剤はま

ず間違ひなく普通のイネにも効いてしまうからだ。それなので、農家は野生イネを嫌うことが多い。だから、野生イネの保護を訴えかけても、農家の支持が得られるとは限らない。

なりながら代掻きするなど誰もやりたがらない。それより、大型トラクターに乗って作業するほうが快適だと思つて農家が增えた。むろん社会全体の風潮がそうだからなのだが、このことが野生イネを農家から遠ざける理由のひとつになりつつある。

むろん東南アジアの農家に、水牛を使った伝統的な稲作を押しつけることはできない。誰だつて快適できれいなほうがよいと思つたろう。しかし機械化、近代化は、かつて日本農業が歩いてきた道である。その顛末がどうであつたかを、彼らに語りかける努力は必要だろうと思ふ。タイはじめ東南アジアの農民が野生イネ保全の意義を認め、彼らの稲作のあり方を考えてくれるようになるまで、辛抱強く待つ姿勢が必要な気がしている。

保全の意義語りかけよう

今東南アジアでは野生イネがものすごい勢いでなくなっている。埋め立て地では日系企業の事務所や工場もよく見かける。東南アジアでは、日本企業は経済発展を支えた立役者だが、一面では野生イネの絶滅に手を貸しているのだ。野生イネの保護活動は、その「罪滅ぼし」の役目を果たしているといえなくもない。

野生イネはまた、水牛の餌として重宝がられてきた。ところが最近、特に都市近郊農家は水牛を飼わなくなっている。水牛を使って泥まみれに

と。野生イネはまた、水牛の餌として重宝がられてきた。ところが最近、特に都市近郊農家は水牛を飼わなくなっている。水牛を使って泥まみれに

◇さとう・よういちろう氏 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「DNA考古学のすすめ」(丸善ライブラリー)など。

執筆者略歴